
 学 会 記 事

第9回新潟てんかん懇話会

日 時 昭和62年10月17日(土)
午後3時～5時30分
会 場 新潟シティホテル 本館

一 般 演 題

1) 後頭部に棘波を認めるてんかん児の
臨床的・脳波学的検討

佐藤 雅久・石塚 利江 (新潟市民病院)
渡辺 徹・小田 良彦 (小児科)

後頭部に発作波焦点を持つてんかん児の臨床的・脳波学的検討を行い、一つの疾患単位とは考えられない多様な年齢構成と臨床症状を持つことを報告した。

①対象は昭和52年10月より61年6月までの8年9ヶ月間に当科を受診したてんかん患者のうち、発作間歇期脳波で後頭部発作波焦点を示し1年以上経過観察し得た15例で、男6例、女9例であった。発作波とは、棘波・鋭波・棘徐波複合・鋭徐波複合を示し、14 & 6 c/s 陽性棘波や6 c/s フェントム棘徐波複合は除外した。

②年齢は、5才8ヶ月より14才4ヶ月で平均9才1ヶ月であった。経過観察年数は、1年3ヶ月より9年11ヶ月で平均4年3ヶ月であった。

③けいれん初発年齢は、4才にピークがみられるが、5ヶ月から12才7ヶ月まで幅広く分布していた。

④既往歴では、熱性けいれんを8例(53%)と多く認め、周産期異常例は分娩遅延で帝王切開を施行した1例のみであった。

⑤発作型の分類では、複雑部分発作(CPS)を12例、全身性痙攣(GC)のみの例を3例に認めた。CPSの12例中GCの合併は3例に認められた。CPSのうち、焦点運動発作として、回転発作1例、一側顔面けいれん2例、上肢の硬直1例、自動症1例を認めた。又、GCのうち、片側性けいれんは1例であった。

⑥後頭部発作波出現時の年齢は、5ヶ月より14才2ヶ月と幅広く分布し一定の傾向は認められなかった。

⑦けいれん発作より後頭部発作波焦点出現までの期間は、15例中9例が6ヶ月以内と比較的早期に出現していた。1例は、熱性けいれんの経過観察中に出現していたが、知能障害があり視覚症状等の発作の把握は困難で

あった。

⑧後頭部発作波焦点の出現部位は、一側性が11例で左が5例、右が6例であった。両側性の出現は4例に認められ、左右同期して出現していた例が3例、独立して出現していた例が3例、独立して出現した例が1例であった。

⑨CTは11例に施行され、1例に淡蒼球の軽度石灰化がみられたが、病因とは考えられなかった。

⑩最近1年以内に発作を生じた例が5例あり、治療法の再検討が必要と思われた。

⑪発症年齢や発作型が多様多様であり、一つ臨床的疾患単位とは考えがたく、今後の症例の積み重ねが必要であると思われた。

2) 結節性硬化症とてんかん発作

一当院で見られた13症例について一

田村 絹代・長谷川精一 (国立療養所)
稲月 原・笹川 睦雄 (寺泊病院)
梶 鎮夫

結節性硬化症は、古典的には顔面脂腺腫・てんかん・精神発達遅滞を3徴とするが、今回『①顔面の血管線維腫または白斑・脱色素斑 ②てんかん発作の存在または既往 ③CTで上衣下に石灰化の3項を満たす者』という診断基準を設定し、これに適合した対象患者13人(男性7人、女性6人、年齢3才1ヶ月～65才で平均14才6ヶ月、発症年齢は生後0ヶ月～12才、平均22.5ヶ月)を、発作が1年以上消失している『発作抑制群』=7人と、発作頻度が不変または50%程度までの抑制しかみていない『非抑制群』=6人とに分けて、両群を比較検討した。

発作の初発年齢は両群とも『1才未満』の発症例が多く、13人中9人(抑制群4人、非抑制群5人)。平均年齢は非抑制群が9ヶ月で、抑制群の2才10ヶ月に比べ早い傾向があった。初発発作型は両群とも『乳児けいれん発作』が最も多く、13人中6人を占めたが、両群各3人で差はなかった。

初診時脳波所見は、突発波を①全般性②全般性+焦点性③多焦点性④焦点性の4つに分類した。抑制群では『焦点性』が、突発波の見られた6人の内5人を占めた。非抑制群では『焦点性』『全般性』が2人ずつであった。

てんかん分類に基づく診断は、両群とも『統完全てんかん』『部分てんかん』が半数ずつで、差はなかった。

全員にCTで脳室内石灰化像が認められ、平均個数は抑制群4.4、非抑制群4.0ヶ。両側の脳室にある者が13人中9人。皮質にも石灰化のある例が、抑制群2人に